

1 東北へ その2 ～福原修先生の夢をつないで～

東北（東日本大震災）のこと、そこで出会った広田中学校野球部のことを書こうとしながらも、どう伝えたらいいか悩んでいたとき、毎日新聞に福原修先生（本校第 16 代校長）の記事が掲載されていることを教えていただきました。



記事を一部借用します。

「カーン、カーン」一。青空の下に響き渡る打球音が心地よかった。1950 年春、県立木更津高に赴任した福原修さん（93）は乾いた音に引き寄せられるようにグラウンドに向かった。泥まみれになりながら白球を追う野球部員の姿を目の当たりにし、「これぞ、平和の音だ」と実感した。

「野球をやめろと言われたら何かがおかしい時だ」と言う。太平洋戦争真っただ中の 4 3 年。旧制安房中から旧制四高（現金沢大）に進み野球部員となった福原さんは、文部省から部の解散を命じられる。…中略…戦争に奪われたのは野球だけではない。半年後、東京帝大に入るとすぐ召集令状が届き、旧満州（現中国東北部）へ。敗戦で捕虜となり、シベリアに抑留されて過酷な労働を強いられた。再び故郷の土を踏めたのは終戦 3 年後の 4 8 年。「シベリア帰りは共産主義に染まっている」と決めつけられて銀行に就職できず、仕方なく教師になった。

だが、**野球をできる喜び**が福原さんを駆り立てた。戦後の混乱期、誰もが貧しく、野球帽を買えずに学生帽で試合をする選手もいた。練習後、毎日、地元の家や商店を一軒一軒訪ね、500 円ずつカンパを募った。あんパン 1 個 10 円の時代。「木更津には知らない人はいない」と言えるほど回った。「がんばれよ」との言葉と一緒にもらったお金で「1 ダース 4800 円もした」というボールを買い、後援会も結成できた。

部長、監督として 14 年、常に感謝の気持ちを忘れず、仲間を信じることの大切さを伝え続けた。甲子園には行けなかったが、58 年秋と 59 年春の県大会で優勝を果たした。

「野球をやっている限り平和は続く。高校野球を盛り上げれば戦争にはならない」と信じる福原さんは 53 年から 32 年間、県高野連会長や理事長など役員としても奔走する。…中略…

つえは手放せないが、10 日の開会式には足を運ぶという。「勝っても泣く、負けても泣く。勝ち負けだけにこだわらず、魂の野球をしてほしい」。野球をすることが許されない悔しさを知る福原さんからのメッセージだ。（毎日新聞 7 月 7 日朝刊より一部抜粋）

そして広田中学校の子どもたち

陸前高田の中心街から東に突き出た半島部に市立広田中学校はありました。

2011. 3. 11…翌日に控えた卒業式の準備を終えた頃、経験したこともない激しい揺れが校舎を襲いました。（廊下の時計はその時のまま止まっています）

広田中の麓には子どもたちの暮らす町が広がっていました。遠くに見える海が、突如迫り上がり、堤防を越え、市街を飲み込み、斜面を駆け上がり、学校に迫りました。高台の縁辺部にあった部室（右下写真）を破壊した波は、避難してきた住民がいる体育館に迫ったそうです。



「万一の際には」と想定していた校舎裏の山に退避することを決定。

職員はお年寄りを背負い、生徒は隣の保育園の園児の手を引き、脇に抱えて斜面を登る。振り返れば津波に飲まれていく町がある。

「前さ見ろ！」…

私が彼らのことを知ったのは、その日から3か月あまり後のことです。陸前高田での支援物資配給業務に就いておりました際に、補給に立ち寄った広田中学校で彼らと出会いました。

校舎は壊れ、校庭は瓦礫集積場と化す中、唯一使用可能な状態として残った体育館は、支援物資の補給基地となっていました。

その体育館で作業する私たちの耳に聞こえてきたのは、そこにいるはずのない子どもたちの声です。

「ファイトー、オー、ファイト！」

反射的にグラウンドに出た私の目に、瓦礫の中を走る子どもたちの姿が飛び込んできました。



10代半ばの子どもたちが体験するには、あまりにも厳しい現実を生きるこの子たちにとって、ここは校庭であり、グラウンド。

重機が往来する瓦礫集積場と化していようが、ここは彼らの学校。

昼間、近くの学校を間借りして過ごす彼らは、放課後になると、ここに集まり練習します。

福原先生が聞いた「平和の音」がここに 있습니다。

どんな時であろうが、子どもたちの「いま」や「明日」

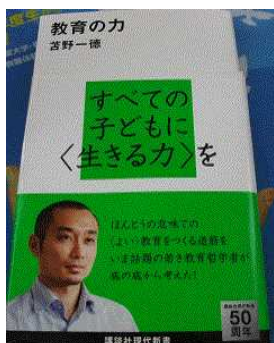
を束縛してはならないということを「平和の音」が教えてくれます。

学校は、その「音」を守り育むものでありたいと思います。

「野球をやめろと言われたら何かがおかしい時だ」との福原先生

の思いを今一度かみしめて、学校の在り方を考えていけたらと思います。…いまを生き、いま光ろうとしている子どもたちのために。

2 読みもの紹介 ～「教育の力」(苫野一徳)～



そもそも教育とは何か。公教育はどのように登場したのか。

人類は、狩猟・採集社会から定住型農耕社会に移るおよそ1万年前から「**普遍闘争状態**」と呼ばれる長い戦いの歴史を編んできたと言著者は言う。

なぜ、人類は戦いをやめることができないのか。

それは、私たち人間が<自由>になりたい、<生きたいように生きたい>という欲望を持っているからであり、他者の<自由>を奪ってでも己の<自由>を求めようとしたところに戦いの背景がある。

この「**普遍闘争状態**」を終わらせるためには、自らの<自由>を守るには、他者の<自由>も認め守るという「自由の相互承認」という原理を徹底的に理解し、

現実のものとしていくしかない。

その道において、最も重要な最初のステップは、「法」を設定することであるが、それだけでは十分ではない。

生存・思想・良心・言論の自由や、職業選択の自由など、基本的自由権が法によってどれだけ保障されていたとしても、自ら生存する力、言葉を交わす力、職業に就く力などがなければ、それは絵に描いた餅に過ぎない。

公教育とは、すべての人々が<自由>に生きられるための<教養=力能>を育むという本質を持って登場したのである。

柴島高校(大阪)の生徒が20年にわたり守り続けた、「**自分を語る**」ことのできる自由…

福原先生がずっと大切にしてきた…「**平和の音**」

マララさんが訴える…**Education is the only solution. Education First.**

いかなるときも、そこに生きるすべての子どもの力(生きる力=真の学力)を支え育むことのできる学校でありたいと思います。